

ベトナム人日本語話者における 名詞の不確実性

留学生と生活者の語りの比較分析

望月雄介・長尾三千代

◆要旨

留 学生としてのベトナム人日本語学習者（留学生）と生活者としてのベトナム人（生活者）に対して絵に描かれたストーリーを語ってもらい、その談話に登場する人物・事物Xを描写する際に現れる表現を分析した。「なんかX」、「Xのような」といった名詞＋不確実性を伝達する表現の使用傾向について、留学生と生活者で比較し、不確実性の差異が生じる原因を探った。その結果、生活者は不確実性の表現を多く使用し、留学生はほぼ不確実性の表現を使用しなかった。これは留学生と生活者の (i) 生活環境及び (ii) 労働環境に起因し、留学生は語りにおける不確実性の表現使用という行為を習得していないのに対して、生活者はすでに不確実性の表現を習得していることが示唆された。

◆キーワード

語り、不確実性、ベトナム人日本語学習者、ベトナム人生活者、談話運用能力の習得

◆ABSTRACT

This study asked both Vietnamese students studying Japanese and Vietnamese residents to express a story depicted in a picture, and analyzed the expressions that appear when describing the people and things X (X: noun) in the discourse. The results show a difference between foreign students and foreign residents' use of expressions that effectively convey uncertainty, such as "nanka X" and "X no youna". The results showed foreign residents used many expressions of uncertainty, while the foreign students used almost no expressions of uncertainty. Results show that due to i) the living environment and ii) the working environment, foreign students have poor ability for using uncertainty in their narratives, while the foreign residents have already mastered the use of uncertainty in their narratives.

◆KEY WORDS

narrative, uncertainty expressions, Vietnamese students, Vietnamese residents, discourse competence

The Expressions of Uncertainty Usage
among Vietnamese Japanese Speakers
Comparing Narrative Analysis
between Foreign Students and Residents
YUSUKE MOCHIZUKI & MICHIO NAGAO

1 はじめに

日本には、実際に働きながら生計を立てている生活者や進学のための準備教育機関で日本語を学習している留学生、あるいは大学や専門学校といった高等教育機関で専門性を極める留学生などがある。同じ国出身の非母語話者が話す日本語であっても、生活者と留学生間で日本語の表現方法に差異が存在するかもしれないし、また、その原因が生活基盤による可能性もある。

本稿では、俵山・望月（2020）の研究を援用し、絵に描かれているストーリーに登場する人物・事物Xを描写する際の表現の選択に焦点を当て、ベトナム人日本語学習者（留学生）と生活者としてのベトナム人（生活者）の語りを分析する。具体的には、「なんかX」、「Xのような」といった名詞＋不確実性を伝達する表現の使用傾向について、留学生と生活者の差異を比較分析し、さらに、その差異がなぜ生じるのかについて、両者の生活環境からその原因を探る。

2 先行研究

語りの談話における名詞の不確実性に関して、俵山・望月（2020）は、ストーリーに登場する人物・事物Xを描写する際の表現の選択に焦点を当て、名詞＋不確実性を伝達する表現の使用傾向について分析した。日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者（中国語母語話者）を対象に調査した結果、日本語母語話者では不確実性を伴う表現を多く使用する傾向が見られたが、一方で、中国語母語話者では比較的不確実性の表現を使用せずに語りが進行していた。さらに、この結果を踏まえて、日本語母語話者と中国語母語話者の母語による語りを対象に調査したところ、中国語母語話者は不確実性の表現を使用していなかったことから、不確実性の表現の使用に関して、中国語母語話者による語りは母語の影響を受けていると結論付けられた。

その他に日本語母語話者と日本語学習者の語りを分析しているものには、鳥（2010, 2011, 2012）、庄司（2001）などがあり、生活者の言語使用を分析しているものにはナカミズ（1998）がある。鳥（2012）では、登場人物である「犬」に関して、

日本語学習者には「ハチ公」といった名前を付けた者が6名(全20名)いたのに対し、日本語母語話者は学習者より少ない2名(全20名)であった。さらに、日本語学習者では「飼い主」に関して表現の選択肢が多かったのに対し、母語話者では特定の名詞に限られていた。烏(2012)の研究は、語りの構造ではなく、語りを構成する要素に関する研究であるため、名詞の不確実性を分析する上では参考にできる。庄司(2001)においても名詞の選択について言及されており、これも同様に名詞の不確実性を考える上では参考になる。

先行研究では、日本語母語話者と日本語学習者による差異については言及されているが、調査協力者の生活背景、生活環境といった観点からは分析されていない。本研究は、ベトナム人調査協力者の生活環境によって名詞の表現方法が異なるのかについて分析する。

3 留学生と生活者における語りの比較

本稿では、俵山・望月(2020)の調査方法と同様に、絵(6コマ漫画)に描かれているストーリーを他者に語ってもらったものをデータとして、留学生と生活者の語りに現れる名詞の性質、特に不確実性に焦点を当てて分析する。

3.1 調査資料と調査手順

今回の調査に用いた漫画は、ドイツの漫画家E. O. Plauenによる『Vater und Sohn』というセリフなしの6コマ漫画集のうちの1編である。考察では日本語母語話者とベトナム人(留学生及び生活者)で比較ができるように考察対象を俵山・望月(2020)と同様の父親、子ども、絵に描かれた動物1、2、鞭に絞った。

データ収集の手順は、まず語り手側に、十分に漫画の内容を理解してもらい、表現方法ではなく内容に関する質問がある場合、事前に調査者に質問してもらった。なお、調査中は辞書の使用を認めなかった。話し手には漫画を見ないで^[注1]、漫画の内容を知らない聞き手にその内容を一続きの物語として日本語で語ってもらった。調査終了後、名詞の不確実性の出現が生活環境に起因しているかどうかを調査する目的で、(1)日本での日常の生活環境について、(2)収入源であるアルバイトや職場の環境について、(3)日本語を使用する相手、使用時間、目的に

ついて、10分ほどインタビューした。

以上の手順に基づき、留学生としてのベトナム人日本語学習者15名と、生活者として日本に在住するベトナム人^[注2]16名を対象に調査を行った。いずれの調査協力者も日本語能力試験N2以上を取得した者が対象者である。調査では音声(ICレコーダー)で収録し、そのデータを文字化した。

3.2 調査結果

ここでは、「父親」、「子ども」、「絵に描かれた動物1、2」、「鞭」を取り上げる。不確実性の表現については、筆者が「名詞に不確実性を付与している」(俵山・望月2020: 34-35)と判断した形式を抽出した。また、原則的に話者の語りで初出の形式を採用した。まず、「父親」と「子ども」について、留学生と生活者がどのように表現していたかを見る。

「父親」及び「子ども」の表現形式に関して、留学生では一つも不確実性が現れず、生活者では不確実性を伴った表現が2件現れた。両者共に「お父さん」(留学生5名、生活者10名)、「子ども」(留学生7名、生活者5名)が一番多かった。生活者では、1名だけ「子ども」への言及をしなかった。右の表1、表2は、生活者に現れた「父親」と「子ども」の不確実性の表現である。留学生の表現に関しては俵山・望月(2020: 39)で述べられているように、「2人の外見的特徴や関係性から、「父親」「子ども」ということが比較的自明であり、それらを使用する動機がなかった」からであると言える。

次に、「絵に描かれた動物1(絵1)」と「絵に描かれた動物2(絵2)」の表現について見ていく。留学生では、「絵1」及び「絵2」への表現形式に不確実性は現れていなかった。「絵1」については、「サル」(3名)、「サルの絵」(2名)とい

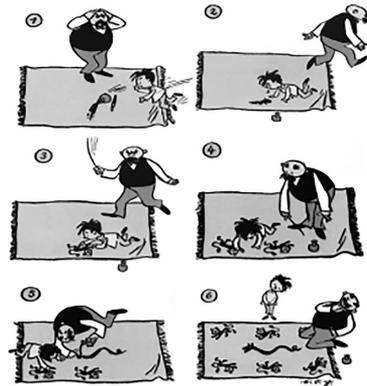


図1 本調査で使用する漫画

表1 「父親」の表現形式 (生活者)

生活者13	50代または、60代の男性
生活者15	お父さんとか、先生

表2 「子ども」の表現形式 (生活者)

生活者1	なんか子ども
生活者13	小学生ぐらいの男の子

った表現形式が現れており、言及なしが2名いた。「絵2」については、「ドラゴン」(2名)、「へび」(1名)が現れており、言及なしが9名いた。それに対して生活者では結果が異なり、「絵1」には3件、「絵2」には3件不確実性が現れた。「絵1」では、言及なしが3名、「絵2」では言及なしが7名いた。生活者の不確実性を伴った名詞は以下の表3のとおりである。

表3 「絵1」、「絵2」の表現形式 (生活者)

話者	「絵1」の表現形式	「絵2」の表現形式
生活者1	なんか <u>モンキー</u> みたいなもの	なんか <u>へび</u> ?が出てきて
生活者6	サルのような絵	竜のような絵
生活者13	サルのような <u>生き物</u>	エビの <u>ような</u> 生き物

最後に、途中のコマから登場する「鞭」の表現を比較する。留学生では、「棒」(7名)、「長いやつ」(1名)が現れ、言及なしは6名であった。生活者では、「棒」

表4 「鞭」の表現形式 (留学生)

留学生1	あの長い細いの <u>棒</u> みたい
------	----------------------

表5 「鞭」の表現形式 (生活者)

生活者1	なんか <u>鞭</u>
生活者13	<u>棒</u> のようなもの

(4名)、「鞭」(1名)などの表現が現れており、言及なしが7名であった。両者の不確実性を伴った表現は左の表4及び表5のとおりである。「鞭」については「言及なし」が留学生5名、生活者6名であり、その他のベトナム人は「棒」や「鞭」、「枝」など何らかの言及をしていた。不確実性の表現は留学生1名、生活者2名とほぼ変わりなく、生活者の方が

上回る程度であったが、明確な差は見られなかった。

4 考察

前節では、留学生と生活者における不確実性の調査結果について具体的に見てきた。本節では、不確実性を表す言語形式が生活者には現れて、留学生にはほとんど現れなかった理由を考察する。

まず始めに、留学生と生活者による不確実性に加えて、日本語母語話者による不確実性も併せて示す。以下の表6は日本語母語話者、生活者、留学生における不確実性の出現を表したものである。日本語母語話者の部分は俵山・望月(2020)によるものである。

表6 日本語母語話者、生活者、留学生における不確実性

	日本語母語話者 (12名)	生活者 (16名)	留学生 (15名)
父	1 (8.3%)	2 (12.5%)	0 (0%)
子ども	0 (0%)	2 (12.5%)	0 (0%)
絵1 (サル)	5 (41.7%)	3 (18.8%)	0 (0%)
絵2 (ヘビ)	4 (33.3%)	3 (18.8%)	0 (0%)
鞭	5 (41.7%)	2 (12.5%)	1 (6.7%)

表6から、日本語母語話者は断定できない事物に対して不確実性の形式を多く使用していることが見られ、それに加えて、生活者も日本語母語話者ほどではないが、不確実性の表現を使用していることが分かる。しかし留学生においては、不確実性の表現が出ていない。今回の調査対象となった生活者と留学生のこの差は、(i) 生活環境、(ii) 労働環境の2点に起因すると考えられる。

(i) 生活環境に関しては、まず日本語にどれくらい触れているかということを挙げる。インタビューから、生活者は職場の日本語母語話者である同僚や友人と日本語で話し、その中でまとまった談話に触れる機会が多くあると分かった。また、生活者から自国の友人より日本語母語話者である友人の方が多く話すという回答もあった。それに対して留学生においては、大学あるいは日本語学校の授業で、教員によってコントロールされた日本語を聞き、話していることが判明した。すなわち、生活者は留学生に比べて、私生活でも職場でも母語話者の日本語に触れる機会が多いのに対し、留学生は生活者に比べて、日本語のまとまった談話に触れる機会が少なかった。

(ii) 労働環境に関しては、明確な差異が存在する。生活者は職場で日本語母語話者である上司または同僚から日本語で指示を受ける機会が多く、また、日本語を使用してベトナム人を含む同僚や部下に指示する立場にある。しかし留学生はアルバイト時に、日本語母語話者や上級日本語話者(ベトナム人以外)

から日本語で、生活者であるベトナム人から母語であるベトナム語で業務の指示を受ける、あるいは上級日本語話者（ベトナム人）による通訳を通して業務の指示を受けるといった情報がインタビューから得られた。つまり、生活者は業務を遂行する上でも日本語を使用しているが、それに対して留学生は日本語を必要としない場面もあった。

以上の理由から、生活者は日本語が飛び交う環境に身を置くことで、日本語の語りに必要な要素を自然に習得しているのではないかということが示唆された。

5 おわりに

本研究では、同程度の日本語を習得している留学生と生活者としてのベトナム人の、名詞の不確実性に焦点を当てて比較分析をした。留学生はストーリーを語る際に、不確実性を伴った表現をほぼ使用しないのに対し、生活者は日本語母語話者のように不確実性を伴った表現を使用していることが明らかになった。また、留学生と生活者の不確実性を伴った名詞の使用における差異は生活環境と労働環境にあると考え、調査協力者とのインタビューを基に、ストーリーを語る上での名詞の表現方法に関する談話運用能力の習得について言及した。本研究による結果を通じて、生活者は日本語母語話者と話す機会が多く、日本人コミュニティで生活するような発話環境にいて、談話運用能力が習得できる可能性を示唆した。

今回はベトナム人日本語話者における不確実性を伴った名詞の分析であったが、今後は外国人日本語学習者がどのように語ればより日本語母語話者に近付けるのか、また、日本語母語話者に近付けるような談話教育が必要なのかどうかといった教育的視点にも着目して、分析を進めたい。

〈望月：立命館大学／長尾：朝日大学〉

注

- [注1] …… 話し手が絵を見ながらそれぞれのコマを説明しないようにするため、漫画を見ないという方法を選択した。
- [注2] …… 本調査では、在留資格「技能実習」、「特定技能」、「技術・人文知識・国際業務」、「経営・管理」、「介護」いずれかを所持し日本に滞在している者、またその在留資格を有する外国人の配偶者（家族滞在）を生活者としてのベトナム人とする。

参考文献

- 烏日哲（2010）「中国人日本語学習者と日本語母語話者の語りにおける説明と描写について—「絵本との一致度」の観点から」『日本語教育』145, pp.1-11. 日本語教育学会
- 烏日哲（2011）「中国語を母語とする日本語学習者の「語り」の冒頭部と終結部における表現的特徴—日本語母語話者と比較して」『一橋大学留学生センター紀要』14, pp.23-35. 一橋大学留学生センター
- 烏日哲（2012）「中国語を母語とする上級日本語学習者の語りにおける名詞の使用について—日本語母語話者と比較して」『日本語／日本語教育研究』3, pp.161-172. ココ出版
- 庄司恵雄（2001）「日本語学習者のストーリー・テリングは語彙選択から見て日本語母語話者とどこが違うか」『群馬大学留学生センター論集』1, pp.1-11. 群馬大学留学生センター
- 俵山雄司・望月雄介（2020）「語りの談話に出現する名詞における不確実性—中国人日本語学習者と日本語母語話者の比較」『日本語・日本文化論集』27, pp.31-48. 名古屋大学国際言語センター
- ナカミズエレン（1998）「ブラジル人就労者における日本語の動詞習得の実態—自然習得から学習へ」『阪大日本語研究』10, pp.83-110. 大阪大学文学部日本語学講座